

6月29日（土）、学習院大学西5号館201教室にて、理学部生命科学科、国際センターの共催による第6回学習院大学ブランディング・シンポジウムを開催しました。『超高齢社会への新たなチャレンジ—文理連携型〈生命社会学〉によるアプローチ』と題する本学のブランディング事業は、今年で4年目を迎えます。小雨の降る中、「生命社会学」として履修している34名の学生のほかに70名の参加がありました。参加者の年齢層は10代から80代までと幅広く、大学関係者だけではなく、生命科学や高齢社会の問題に関心を寄せる一般市民の方々にも多くご来場いただきました。



趣旨説明をする末廣昭先生（本学国際社会科学部教授）

今回のシンポジウムでは、「超高齢社会の日本」を「アジア」と「ロボット・AI」という切り口から考えるために3名の先生方をお迎えし、約50分ずつのご報告をいただきました。

東アジア福祉システムの比較研究の第一人者である金成垣先生によるご報告「東アジアの高齢化と福祉政策」では、日本より速いスピードで高齢化、少子化が進む韓国を事例として、高齢者を取り巻く社会的・経済的問題が丁寧に紹介されました。特に、韓国では年金の給付水準が低いため、高齢者の貧困が深刻になっているようです。それに対応すべく、地域の「社会福祉館」による多様な福祉活動が展開されている状況が報告されました。その運営体制のあり方や持続性に関して、熱心な質疑応答がかわされました。



金成垣先生（韓国出身・東京大学大学院人文社会系研究科准教授）



李蓮花先生（中国出身・東京経済大学経済学部准教授）



会場の様子

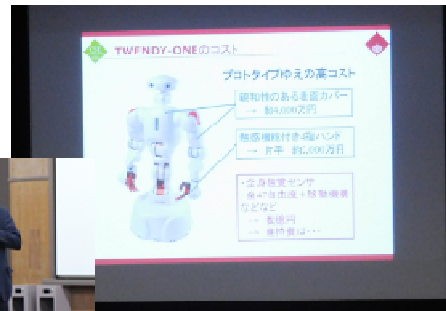
アジアのケア問題をご専門とする李蓮花先生のご報告「ケアのグローバル化と外国人ケア労働者：国際比較と日本」では、外国人ケア労働者の受け入れ実態がドイツ、イタリア、台湾、日本など各国のデータ分析から解説されました。そして、「介護手当」という現金給付がなく、また住み込み労働も少ないという日本は、国際的にみても外国人ケア労働者の受け入れハードルが非常に高いことが指摘されました。こうした状況の中で始まった技能実習制

度の拡大（2017年～）や在留資格「介護」と「特定技能」の新設は、専門家に偏りがちな日本の介護に大きな変化をもたらすものとして、超高齢社会を考える新たな論点が提供されました。

最後の菅野重樹先生によるご報告「超高齢社会にロボット・AIは役立つのか？」では、人間が五感を総動員して行う「介護」にロボットがどのように関わられるのか、その可能性と課題についてお話いただきました。

私たちが、大きな期待を抱きがちなのロボット。しかし現実的にその開発や維持にかかるコストは膨大であり、まずは「なんでもできる人型ロボット」よりも、「単機能の支援装置的なロボット」を導入していくことが目標であるとの道筋が示されました。

「バク転できるロボットが、高齢社会に役立ちますか？一立たないでしょう？」という問いかけは「未来の介護問題はロボットが何とかしてくれるのではないか」との考えを抱いていた学生達にとって、「大きな衝撃だった」という感想が多く寄せられています。沢山の来場者のイメージを覆す印



菅野重樹先生（早稲田大学創造理工学部教授）



総合討論の様子

象的なご報告でした。

最後の総合討論では、3名の先生方が揃って登壇されました。地域の高齢者を支える福祉システムの持続性、また超高齢社会のその先にある社会像について、参加者を交えた議論がかわされました。

プロジェクトの最終年度まであと1年。超高齢社会を取り巻く最先端の変化が、地域、制度・政策、科学技術という多角的な視点から捉えなおされたことによって、「超高齢社会に対応可能な社会基盤の整備に向けた提言」というプロジェクト最終目標に向け、また一つ前進するシンポジウムとなりました。



閉会の挨拶をする荒川一郎先生
(本学理学部教授)